

登別市長賞

同志社大学大学院総合政策科学研究科
今川ゼミ B

登別の『自治を問う』

わたしたちが考える市民自治とは、市民が主人公としての責任を自覚し、行政や議会と共に考え、解決のために行動することであり、そのためには地域の課題に関わる情報を共有することが必要です。

そこで、わたしたちは広報のあり方について調査しました。その中で、恵庭市の広報紙の特集『自治を問う』に着目しました。これは、恵庭市長汚職事件を正面から取り扱った特集で、情報を求める市民、責任に目覚める市民の姿が描かれています。ここから行政がとことん情報を伝えれば、市民は責任を自覚するということがいえます。そこで、2005年から2009年までの広報のほりべつと広報えにわの比較を行なったところ、登別は一般的な課題を取り上げているのに対し、恵庭は切実な地域課題について取り上げていること、登別は、決定済みの情報が中心であるのに対し、恵庭は案の段階から情報を開示し、市民に意見を求めていること、登別では、都合の悪い情報は積極的に掲載しないのに対し、恵庭、都合の悪い情報も明らかにしていることなどから、登別は地域の課題の掘り下げが不十分と考えます。そこで「登別の『自治を問う』」という提言をします。

地域課題を深く掘り下げた広報紙の特集を組んでみてはいかがでしょうか。まず今回のフォーラムの提言を中心に市民自治を巡る地域の課題を特集で扱い、企画の一環として市民、職員、議員、教授、学生を交えた座談会を開催します。そして、市民自治のあり方について意見を募り次の号に掲載します。最後に、協働に悪いイメージをもつ方もいらっしやると思いますが、私たちの考える市民自治こそが本来あるべき協働の姿ではないでしょうか。



登別市議会議長賞

日本大学法学部外山ゼミナール B

登別ネオ・フロンティア計画

登別市は、市民自治の推進的役割を市民自治推進委員会が行い、また、まちづくり基本条例の設置や市民フォーラム、議会フォーラムを行っています。しかし、市議会議員選挙の投票率や議会フォーラムの参加者は、年々下がっているなど、市民の参加意識は希薄であり、また、若者が議会フォーラムに参加しないことなどの現状があります。わたしたちは、議会の制度的な改革が必要と考え、直接民主政治と議会改革について提言します。

議会改革を進めるためには、まず、市を4つの区域に区切り地域自治区制度を活用します。この地域自治区制度とは、行政区域の全域を自由に区切ることができる制度であり、地域の住民の意思を反映させつつ、行政を処理させるために設置するものです。そして、ここで最も重要となるのが協議会を置き、住民総会とすることです。わたしたちが考える住民総会は、その地域に住む人が一堂に会し、地域の問題点について話し合う制度のことです。より身近に市民の声を聴けるだけでなく、16歳以上の人なら誰でも参加でき、もちろん外国人の方も参加ができます。住民総会は意見集約のみ行います。そして重要になってくるのが市議会です。市議会は各自治区を移動して住民総会で出た要望を審議や議決する『移動型議会』を行います。つまり先程の住民総会に移動型議会が加わることで、市民自治をより助長することができるのです。また、傍聴者を多くするため土日や夜間に開催します。政策を決定してから市民と協働する場合、行政主導となってしまうことが多いです。だから政策形成過程から市民と議会が協働を目指すのです。そして、これこそが真の市民自治といえます。



この移動型議会を取り入れることは、日本の超最前線、つまりネオフロンティアと言えるのです。

政策マネジメント研究所賞

同志社大学政策学部風間ゼミ

B級グルメをA級(永久)に

わたしたちは、北海道旅行のパンフレットを見ましたが、登別は夕方に来て、次の日の朝には出発するといった宿泊がメインのプランばかりです。実は、登別は観光地ではなく宿泊地なのではないのか。この問題を解決するため、市民団体では地産地消を合言葉に、海鮮バーガーなどの開発と販売に取り組んでいます。見た印象は、いまいちパツとしません。理由は、地元の人があまり食に興味がないこと、ほかの人が一緒に取り組まないためPRが不足していることです。このことから、わたしたちは、市民、地域、市によるB級グルメを生かしたまちおこしを提案します。

B級グルメは、地元食品を使った安くておいしい料理のことで、それらのNO.1を決めるB1グランプリが毎年開催され、テレビに取り上げられるなど、親しみやすいものになっています。この事業を行う上で重要なのは、長期的な人材の確保で、特に若者の参加が必要です。若者がまちおこしに参加するきっかけとしてB級グルメは取り掛かりやすいと考えました。そして、若者と共にまちおこしを行う新しい世代の創造につながると考えました。

効果としては温泉目的の観光客だけでなく、目玉商品を目的に登別へ訪れてもらうお客さんが増加するほか、チェックアウト後、目玉商品を食べるまでの2・3時間を観光施設で過ごすなど、滞在時間の延長が図られます。ことによって、観光地としての機能が高まることが期待されます。わたしたちの予想では、観光客は年間40万人は増えるの見込んでいます。

これにより今後、登別が目指すべき将来像がここに生まれます。つまり継続的に行うことで、その商品が特産品となります。それはつまり登別は観光だけでなく『まち』として永久(A級)に栄えるということです。

